

1. 誰もが作文を書けるように

あるクラスの補助にいくと、6年生で、鉛筆を立てたまま何も書けない子が数人はいました。

そこで、すべての子が書けるようにと願って指導しました。
とにかく子どもが、よく書けるようになりました。その報告です。

あるとき、こんな電話がありました。

「うちのKは、学校から帰ると、普段は、ランドセルをほおり投げて、外に遊びに行ってしまうのですが、ここ2・3日、机に向かって、何か、書いているのです。何を書いているのでしょうか？」
というのです。

これは、3年生で、「物語を書く」を指導した時のことです。
全ての子が、自由に書けるように指導して、それから、この「物語を書く」
に入った時のことです。

K君のように、子どもは、書きたいのです。書き方が分かれば、書く内容は、いくらでも、持っていますから、書けるのですね。だって、子どもが、**思う事・考える事などは、たくさんあるのですからね。**

そして、K君は、『**インディアンの逆襲**』という題で、**30枚**書きました。
K君は、今は、30歳過ぎましたが、大切な宝にしているようです。

このほか、こんな例もあります。
6年生の指導です。移動教室の記録作文でした。
最低で、30枚、書きました。100枚、平均、書きました。
最高は、160枚書きました。

この事は、下記の本にまとめました。

『小学生の作文教育』(明治図書)1・2・3・/4・5・6年

(読売教育賞賞外優秀賞 受賞)

心理学者の波多野完治さんから、「新しい作文教育の提案です」と言うコトバを戴きました。

残念ですが、絶版です。しかし、アマゾンなどの古書で売られています。

2. 主述の対応の指導（1）

3年生を受け持った時のことです。初めての作文を書いてもらいました。

題は、『3年生になって』でした。40人ほどのクラスでしたが、主述のはっきりしない文を書いた子が数人いました。

「きのう、いえに、かえって、おかあさんにはなしたことは、『ぼくのともだちの6年生のKくんという人の先生になってよかった』とおもいます。」

というような文でした。

この主述のはっきりしない文は、どうして生まれるのでしょうか。

それは、**主述の対応の指導**が十分されてきてなかったからなのですね。

思い起こせば、僕のこの主述の対応の勉強は、国語で習ったのではなく、**英語**の学習でした。

今では、小学校1年生でやりますが、これの徹底には、配当時間だけでは、無理みたいですね。ですから、上記のような文を書く子どもが出てしまうのですね。

このことで、**市教研で公開研究授業**をした時のことです。

講師に文法指導の第一人者、児言研の M 氏をお呼びしました。

学習院で、天皇の担任をしたことがあるとかと聞いたことがあります。

研究会で聞く**学習院の指導は、僕の指導時間の数倍**でした。資料も数倍でした。子どもの認識に基づいた授業は、こうなると分かりました。

（僕の指導時間は、それでも指導書の3倍は配当しました。）

この**主述の対応の学習は**、

作文だけではなく、

説明文・文学文の読み、

話す・聞く、

表現よみ

の**学習にも役立つ**のですね。

ですから、ちゃんと、学習しておく、とても役に立ちますね。

「**何がどうした(する)**」の**意識**を持って読む、聞く、話す、朗読(表現よみ)することなしには、それらの学習の理解は、できないですからね。

3. 主述の対応の指導（2）

主述の対応の指導後、どの年度の子でも作文が苦手、書くのがいやだという子はいなくなりました。書くことが面白くなり、移動教室の記録文を最低の子で、30枚(400字詰め原稿用紙)書きました。文というものはどういふものか、分かったからでしょうね。

この主述の対応の指導は、『文』の指導とも関係あります。関係というより、『文』の指導そのものと言ってよいでしょう。

さて、文ですが、これには、一般的には、**主語と述語**がありますね。

この主語と述語の**意識を持たせる**ため考え出されたのが『**文ちゃん人形**』です。



あたま(主語)

からだ(述語)

を意識させるための人形です。

* この文ちゃん人形が、どのような経過で出てきて、使われるようになったのかは、僕には、その研究会には、まだ立ち会っていませんので分かりません。

児言研の理論面のリーダーの大久保忠利氏の助言があったと思われます。

氏は、『**日本文法陳述論**』を発表し、文法研究に歴史的な功績を残された方です。

文意識を徹底して持たせる。この人形を使うことによって、文が主語(主部)と述語(述部)からできているイメージをしつかり持たせます。

これを徹底しておく、ねじれ文を書く子がいなくなったのです。これは、文を読むときにも、アタマの中で、使っていたと思います。話を聞くとともに。その事を抜いて、文の理解や話の理解もできないのですから。

文ちゃん人形を使って、次のようなことをしました。

1

男の子が走っている絵、お母さんが笑っている絵、自動車が走っている絵、……、……

これらの絵を見せて

「だれが何をしていますか」

の形で、子どもに聞きます。

子どもは、答えます。

()が、はっています。

.....
.....
.....
.....
.....

この事によって、誰が(何が)意識を持たせます。10題は、したいですね。(1年生で、30分はかかります)

2

女の子が、ご飯を食べている絵、犬が、歩いている絵、男の子が、バットを振っている絵、……、……、絵を見せて、

「なにを していますか」を聞く。

女の子が、()。

.....
.....
.....
.....
.....

この事によって、「何々している(した)」意識を持たせます。(1年生で、30分はかかります。)

女の子が、ご飯を食べている絵、犬が、歩いている絵、男の子が、バットを振っている絵、……、……、

3

文ちゃん人形は大きく分けると、**頭と体に分けられる**ことを確認して、**文もあたまと体に分けられる**事を話し合う。

その後、簡単な文を**頭と体**に分けてみる。(10題程)

このようにして**文意識を徹底**させます。(1年生で30分は必要)

家庭でこの指導を行う時の**ヒント**もを書きます。

1 **人形は、家にあるもの**、どんなものでも良いでしょう。**アタマと体**が分かれているものが良いでしょう。とにかく人形を導入することが、子供に主述の対応をイメージさせるために、大切なですね。

2 次に、カードですが、**単語カード**を使うと良いでしょう。これは、学校でも使いました。教師が、子どもの話に合わせてカードを黒板に置きますが、その時、それに合わせて、子どもには、自分の机の上に単語カードを並べさせました。友達が話した文にあわせて、何も書いていないカードを並べさせます。

3 単語カードの次は、**おはじき**を使いました。カードの代わりにおはじきを使ったわけですが。単語カードより、おはじきの方が、並べやすいし、場所を取らないなどの利便性があります。

4 次は、**指**でした。教師が、子どもの話に合わせてカードを黒板に置きますが、その時に、それに合わせて、指を折らせていくつカードが並んだかを数えさせます。

このように、単語カード・おはじき・指などを使うと、おしゃべりをする子が独りもいませんでした。**おしゃべりをする暇が出来ないから**でしょうね。

このようにして、主語(主部)と述語(述部)を徹底したら、

次は、**文カード**を使って、文意識を徹底させる事について述べます。この文カードを使うと、子どもは、どんどん文を考え、書きます。ここでも文意識の徹底です。

*このようなことは、6年生でも文意識が徹底してない場合には、取り入れると効果があります。その場合、高学年であるというプライドを傷つけないことが大切です。

高学年では、短時間でできます。理解力などが発達しているからです。

4. 文カードを使って

子供に主述のはっきりした文を発表させ、それを教師が文カードに書き入れ、黒板に提示します。

*カードは、大きさは、横7センチ、縦25センチメートルのいためがみを使用しました。
この大きさのいためがみが、黒板のチョーク置き場に立てやすいからです。

* ご家庭でするときは、英語の単語カードでよいでしょう。

1年生の子供たちは、先生に話したがっています。
そこで、『先生に話したいこと』という題で、話させるのです。
文ちゃん人形の手描き(厚紙で描いたもの)を黒板にのせます。

その話を**文(主語と述語が基本)の形**で話させます。いきなり、話をさせます。ノートに書かせるのは、話すが、スムーズにできるようになってからです。

A君は、次のように話しました。

- 1 ぼくは、きのう、かえってから、ケーキを食べました。
- 2 ケーキは、あまかったです。
- 3 そのうちに、おにいちゃんが、かえってきました。
- 4 おかあさんは、おにいちゃんにも ケーキをあげました。
- 5 おにいちゃんは、おいしそうに たべていました。

おわりです。

Aくんは、**5つの文**でお話できました。

この中で、1つの文に対して、1枚の文カードを黒板に並べてあげるのです。
ですから、A君は5枚の文カードを黒板の並べてもらいました。

すると、子どもは、幾つの文で話ができるか、挑戦します。

中には、50個も60個もの文を作って発表する子どもでできます。

はじめは、文の形で話すと言う事が理解できなかった子ども、みんなの発表を聞いているうちに、分かってきます。

そして、やがて、発表も出来るようになります。
こういう中で、発表できない・しない子どもはいなくなります。

これは、

「話す」から「書く」への移行の学習です。

「話す」を取り入れると、学習が楽しく分かるようになります。

このことは、**体育、算数など全ての学習**で取り入れて、効果が上がりました。

この事を繰り返す中で、**文意識(主語と述語の感覚)**が肉体化します。

これを**3時間**ほどします。

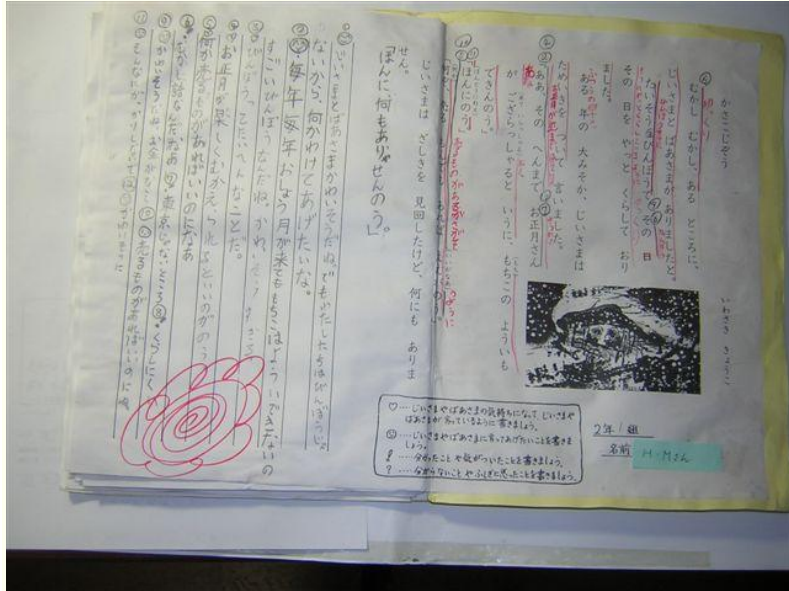
つぎは、『**・・・した事**』という題で少し、**テーマ性**を持たせた話をさせる事について述べます。

5. テーマ性を持たせた話をさせる

書きたい時に書く力を着ける、これも言葉の力ですね。

先ず、その力とは、どのようなものか、

右に提示した資料で、見ていきましょう。

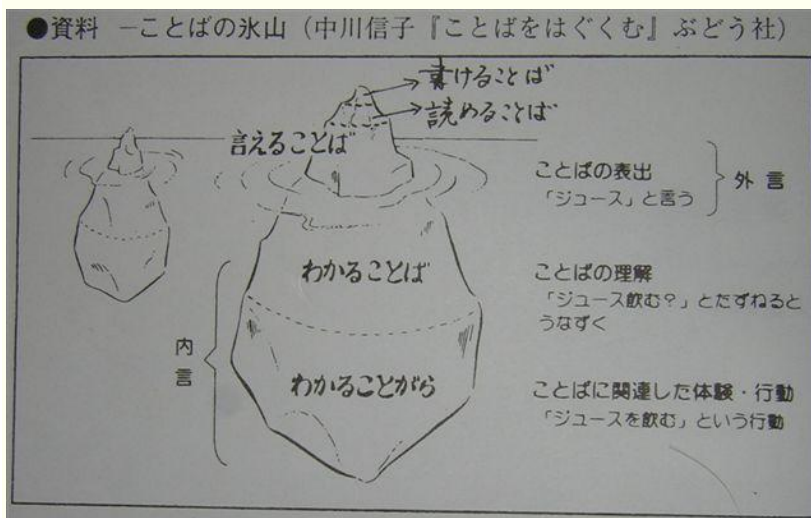


『かさこじぞう』2年生の子が、その語・句・文・文章を読んで
感じたこと・考えた事を書きました。

このように何故、書けるのでしょうか。

それは、人間には脳があり、その中で、思い、考える事が、あるかあらですね。

その事を次の文図は、表していますね。



この図のように、人間が外に現す表現は、氷山の出た部分ですね。

ですから、子供たち(人間)は、いくらでも、書くことは、あるんですね。

それが、次の作文に出ています。

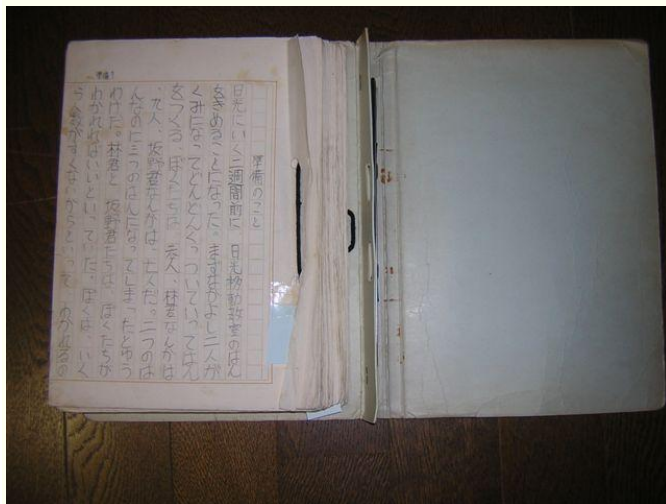


日光移動教室(6年生の遠足的行事)の作文です。

これは、2人の子供の作文です。一人、1冊作りました。

一人、平均、400字詰め、100枚書きました。

書くことは、あると言う事でしたね。「ことばの氷山」によれば、次は、その内容です。



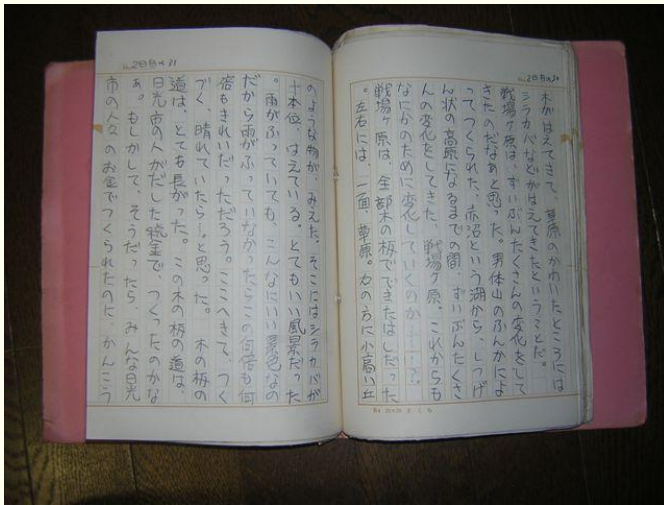
ここでは、まず、移動教室の準備の事を書いています。

よく、大人で、自分のことばかり、長時間、しゃべる人がいます。

この作文は、その世界ですね。自分の事だから、いくらでも、楽しく、進んで書けるのですね。

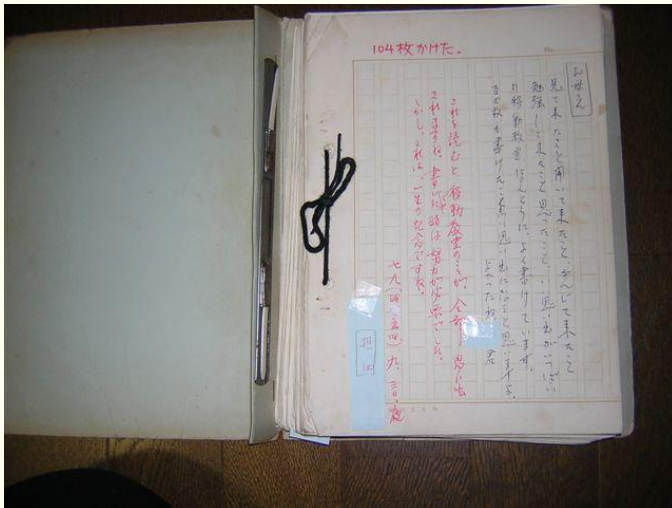
この書く中で、

「書きたいときに書ける力」が着くのですね。



ここは、日光移動教室の「戦場ヶ原の様子」を書いています。
子供にとっては、初めての光景です。それが、記憶に残っています。

僕等より、ずっと、記憶力はいいですね。



ここは、最後の部分です。
お母さんの感想が赤でかいてあります。担任(僕)のコメントも。

さて、このように、書ける、
それには、段階を追った指導がありました。
その事を、次にかきます。

ここまでは、**時間的な順序**で思いついた事を何でも話せば良いのでした。

これは、**主語(アタマ)**と**述語(カラダ)**の指導の徹底が目的でした。

ですから、その意味はあり、それで楽しくやってきました。ここでは、

テーマ性を持って、書くことの指導について書きます。

認識を深めるには、

ある一つの事を見つめていく必要がありますね。

その為に

「……のこと。」

「……したこと。」

の題を設けて、子どもに話をさせます。

「……したこと」

これは、限定をするのですから、テーマ性につながりますね。

さて、「……したこと」の指導では、どのような授業をしたかご報告いたします。

……以下、ご報告です。…

教師 「……したこと」

「……の事」など、前置きを言ってから、その前置き(……のこと)について話をしましょう。と、投げかける。

A子 「がっこうからかえって、いもうととあそんだこと」をはなします。」

と前置きを言って話し出す。

(この前置きを言わせる事がテーマ性を持った話をさせることのポイントです。)

- 1 わたしは、がっこうからかえって、いもうとの花子とあそびました。
- 2 花子は、わたしに おんぶさって きました。
- 3 わたしは、おもしろくて あるきまわりました。
- 4 花子は、こわいと いいました。(子どもは、このように、くどいほど、主語を出して発表をします。)
- 5 わたしは それでも あるきまわりました。

6 花子は おおきなこえで こわいと いいました。(子どもは、このように、くどいほど、主語を出して発表をします。)

7 わたしは おろしてやりました。

「おわりです。」

ここでも、

話をさせながら、

1文に1枚のカードを並べていきます。

文意識(頭と体)の徹底の為です。

カードの導入をすると、話をどんどんするようになります。

ですから、このことに効果があることは確かです。

次にこのテーマ性の導入ですが、

「……したこと」のお話をして下さいと指示しても、

殆どの子が、それが、どういうことか、

始めは分からないようです。イメージが湧かないのです。

ところが、中にそのことが分かる子がいますから、

このように発表させて、

ほかの子に聞かせますと、

(ああ、そういうことか)と分かって、

全ての子が、発表をできるようになります。

このようにして、**全員の子どもに話をさせます。**

ですから、2～3時間は必要です。

これが、

全ての子どもが書ける作文教育の基礎になります。

ですから、「この2～3時間は、基礎をやっているのだ」

という考えで、子どもにゆったり感を持たせ、楽しみながら指導をしたいものですね。

このような授業が出来ますと、

子どもの喜びは大きくなり、ストレスなど解消されます。

ですから、授業が非行をなくす大きな力になります。

このような授業は、教師に憧れてなったその目的に近づけてくれます。

ここには、「話す」から「聞く」の指導過程を通した作文学習の良さがあります。

それと、ここにも、集団学習のよさがありますね。

このように、作文は、順序を追って指導しますと、誰でも書けるになります。

運動会の作文や遠足の作文も

このような記述指導と並行して指導したいものです。

そうすると、しっかりしたものが書けるようになるのですね。

子供たちは、時間的順序にしたがって、したことをした通りに書くことは、誰でもできるようになります。

遠足の作文、朝、起きてから、学校に来て、遠足に行って、帰宅までの事を500枚書いた2年生がいました。

次は、自分が書きたいと思った事(もっとテーマ性を深める)

を書くことの指導です。これもその指導のコツがあります。

その指導で全員、書けるようになりましたから。

この研究は、仲間との長年の実践研究のご報告です。

6. テーマ性を深める

ここでは、時間的な順序ではなく、あるもとまった事を書く指導について述べます。それには、そのことの取り立てた指導の必要があるからです。

*これは、1980年代の仲間との共同実践です。今、この事を振り返ってみて、矢張り、この取り組みは、画期的だったと思います。

『すべての子供たちがテーマのある作文を書ける指導の過程』の提案は、その頃、無かったように思います。

しかし、テーマについて書く事の大切さは、誰もが、願っていましたし、その大切さを主張していました。

それでは、それをどういう指導過程で？となると、その答えが出てなかったように思います。現在ではどうなのでしょう？

このことを書くには、まず、**自分の心に強く残って、印象深いもの**を見つける必要があります。

では、自分の心に残ったものとは、子どもにとってどういうものなのでしょうか。

子どもに

「自分の心に残ったものを書きましょう。」

「大切な事をしぼって書きましょう。」

などと言っても、その投げかけコトバでは、子どもは、どうしたら良いか分からず、今まで通りの作文を書かざるを得なかったようです。子どもに、教師の意図が、通じないのです。

そこで、ぼくらの研究会の先輩が考えた投げかけ言葉は、

『**ニュース**』というものだったのです。

「きのうのことで、**自分にとってのニュースはありますか？**」と、3年生の子供に投げかけました。

子供は、

- おばあさんと デパートに行ったこと
- 夜、トランプをして遊んだこと
- おじいさんに勉強を教わった事

をあげました。

これを僕の3年生の教室に取り入れてみました。

みんなにとってのニュースというのは、こういうものだよと言って、上の例を出して説明しました。

さて、「きのうのことで、みんなにとってのニュースはどんなものがあるかな。」と投げかけました。挙手は、2〜3人です。この挙手をした人に**全員発表**をさせました。

さて、「さっき、発表しなかったけれど、今、**ニュースが見つかった人**はいるかな。」と問いかけました。10人前後、挙手をしました。全員に発表をさせました。

そのあと、また、「さっき、発表しなかったけれど、**今、ニュースが見つかった人**はいるかな。」と問いかけました。15人ほど挙手をしました。全員に発表をさせました。

こうして、**全員に発表**させました。

それは、ここでいうニュース(自分の心を動かした事)を、全員で、確認しておきたかったからです。

それに、子供たちに、その日のことを振り返ってみさせ、自分の心を動かしたものを見つめさせたかったからでした。そうすることで、一日がただ、通り過ぎていってしまわないようにしたかったからです。

これが、全員できたら、次の時間は、**その日で、心を動かした事3つ**を挙げさせました。これを**3大ニュース**と言う事にしました。

この3大ニュースを全員が見つke、発表できるようになるには、3時間は、要しました。

次は、**その3大ニュースの中から1つを選び日記に書く**ようにしました。この1つ選ぶ事も全員が出来るように指導しました。ここで1時間は、要しました。

以上の指導過程を経る事によって、したことを羅列的に書くのではなく、あるまとまった事を書くことができるようになりました。これがテーマのある作文(論文)を書くことにつながっていくのでした。

この3大ニュースの指導で、**5時間**、要しました。

でも、時間的順序、羅列的な文章だけではなくテーマがある文章が書けるようになるのですから、この時間は、ゆったり、たのしく指導ができました。

これは、教師をしている喜びでした。